

様式 7

論文内容要旨

| | | | |
|--------|----------------------|-----|-------|
| 報告番号 | 甲 先 第 180 号 | 氏 名 | 濱井 宣明 |
| 学位論文題目 | 明治期の吉野川洪水の実態把握に関する研究 | | |

内容要旨

この学位論文は、堤防が脆弱だった頃の明治期の吉野川洪水を対象として、洪水の状況や被害等を整理して実態把握を行い、過去の洪水の状況を様々な角度から分析し適切に情報発信を行うことで、現在の地域の防災力を向上させる可能性を見出し、その有効性について示した。

河川堤防等の河川管理施設やダム等の洪水調節施設の整備がある程度進んだ現在も、過去と比べて頻度は少なくなったとはいえ、依然として大規模な洪水により、各地で甚大な被害が生じている。近年の浸水被害では、堤防の内側で水が貯まる内水型が多く見られるが、2012年九州北部豪雨災害の矢部川の事例のように、ひとたび洪水によって堤防が決壊すると、その周辺で大規模に浸水し、家屋が倒壊するなど大きな被害が発生している。

また、堤防による物理的なハード整備が進むにつれて大規模な災害に遭遇しなくなった地域では、その安心感から地域の防災意識が低下していることが懸念されている。

従って、洪水被害を軽減するためには河川堤防などのハード整備に加えて住民の防災意識を高めて、適切な避難方法を浸透させるためのソフト対策（たとえば、地域の洪水氾濫の実情を伝えて、防災意識を高めることや住民自らによる避難計画立案を支援するなど）を充実させることが重要である。

本研究ではソフト対策の1つとして、吉野川で発生した過去の水害を検証し、地域での洪水危険性について改めて理解を深める資料を提示しようとしたものである。具体的には、堤防整備が脆弱だった頃の明治44年8月の洪水に焦点を当て、徳島河川国道事務所に保管されていた明治期における吉野川水位記録、明治34年河道実測平面図を用いて、当時の洪水氾濫の状況を数値シミュレーションにより推定し、徳島毎日新聞をはじめとした地元新聞に記述された洪水被害状況と照らし合わせて当時の洪水被害の実態を検討した。また、洪水の氾濫解析によって、様々な角度から洪水の実態を分析することで、その河川本来の洪水危険性を認識し、且つ地域へ正しく情報発信を行うことで、今後の地域の防災力向上に活かせる方法について検討を行った。

様式9

論文審査の結果の要旨

| | | | |
|--|---|---------------------------------|-------|
| 報告番号 | 甲工 第 180 号 甲先 | 氏 名 | 濱井 宣明 |
| | 審査委員 | 主査 武藤 裕則 副査 中野 晋 副査 上月 康則 | |
| 学位論文題目 明治期の吉野川洪水の実態把握に関する研究 | | | |
| 審査結果の要旨 本論文は明治期に吉野川で発生した主要な洪水に焦点を当てて、徳島県での水害発生状況を検討したものである。国土交通省四国地方整備局徳島河川国道事務所に保管されていた明治期の吉野川水位記録や河道実測平面図に基づき、洪水氾濫状況を数値シミュレーションにより再現し、徳島毎日新聞などの当時の地元新聞に記述された内容とも照らし合わせて、河川堤防などの河川整備が未整備な時代の水害実態を明らかにした。また、現在の河川整備状況と対比し、河川整備事業の有効性についても提示することにも成功している。近年、計画規模を超える豪雨により、破堤を伴った氾濫被害が頻発しており、洪水被害を軽減するためには河川堤防などのハード整備に加えて、避難対策を中心としたソフト対策の推進がますます重要となっている。本研究は流域住民の防災意識を高めるために、過去に起こった洪水被害の実態を正確に分析し、これを住民に情報提供することを目指したもので、こうした研究を進めることの意義を具体的な事例をもとに提示したことにも大きな意義を有していることが認められる。 本研究はこれまでほとんど研究事例がない明治期の洪水災害実態を明らかにするとともに、歴史的な洪水被害の実態をわかりやすく地域住民に情報提供して防災意識を高める手法を提案したものであり、本論文は博士（工学）の学位授与に値するものと判定する。 | | | |